みなと物語

今も残る私たちの足「渡船」

浪花百景「しりなし漆づつみ 甚兵衛の小家」大阪城天守閣蔵

「水の都」と呼ばれた大阪では橋のかわりに渡し舟が重宝されていました。港区に関係のある渡船のなかでは、松の鼻渡、櫨（はぜ）の渡、甚兵衛渡などが有名でした。松の鼻渡は嘉永6年（1853年）の創始と伝えられています。櫨（はぜ）の渡は尻無堤の櫨の木の紅葉とともに名高く、岩崎橋が架橋されるまでは大正区へ通じる交通機関として利用されていました。甚兵衛渡は老農・甚平によって設けられ、その渡小屋は蛤茶屋と呼ばれて名物のシジミやハマグリを賞味する人でにぎわったそうです。

「尻無川の甚兵衛渡」（明治期）
大阪城天守閣蔵

明治24年に大阪府は渡船営業規則を定め監督取締りを行うようになりました。それまでの渡船は渡守として代々世襲で行われていましたが、明治38年に天保山渡船場が初めて市営となって以降、料金の均一化と危険を避けるために市営事業として市の管理へとかわっていきました。大正9年、旧道路法の施行により渡船は無料となり、昭和7年にはそれまでの請負制を改めてほとんどが市の直営となりました。昭和20年には戦災でその多くを失いましたが、昭和30年頃の港区には三丁目渡、開昇渡、松の鼻渡、築港渡、天保山渡、中渡、甚兵衛渡、福崎渡、鶴浜渡の9つの渡船がありました。橋や道路の整備が進むに連れて渡船は徐々に廃止され、平成元年には甚兵衛渡と天保山渡の2つになりました。しかし、今も私たちの大切な「足」として活躍しています。

甚兵衛渡船場（昭和58年）